



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4034 号 2017.11.22 発行

手作り自助具20年 福岡市のボランティア工房 高齢者や障害者に「自分でできる喜び」
提供

西日本新聞 2017年11月21日

100円ショップで買える材料を使って、背中を洗う自助具を試作する山脇一馬さん=11日午後、福岡市中央区



完成したばかりの自助具を使って、15年ぶりに字を書く貞包理恵さん=11日午後、福岡市中央区



手の甲でボトルキャップを押すだけで、シャンプーを手にとれる自助具

体の不自由な高齢者や障害者の日常の作業を助ける生活便

利用具「自助具」。個別に依頼を受け、身近な材料を使って手作りする工房が福岡市にある。アイデアを練り、製作するのは60～80代のボランティアの人たちだ。開設から20年目、「自分でできる喜び」を提供してきた工房の一日をのぞいた。

工房は1998年に開設。福岡市中央区の市介護実習普及センター内にある。学校の教室ほどの部屋に、工具が並ぶ。

午前10時半すぎ、車いす生活を送る貞包理恵さん（39）＝福岡市西区＝がやって来た。交通事故で四肢まひの障害がある。10月から通い始めた職業訓練で、字を書く練習をするための自助具が欲しいという。

鉛筆が握れない貞包さんのために、ボランティアの安武重昭さん（74）＝同市中央区＝はU字形に曲げた幅2センチのステンレス製の板に、鉛筆を挟むためのクリップをねじで固定した。次にベルト作り。唯一動くという貞包さんの右手を取り、手のひら回りに面ファスナーを巻き付けてぴったりの長さでカット。ベルトの先端がほつれないように接着剤で固め、皮膚に触れる金具の裏には痛くならないようにゴムを貼り付けた。きめ細やかな作業からは、優しさが伝わってくる。

ベルトに金具を装着したら完成。時間にして2時間半。貞包さんが自助具を着け、ゆっ

くりと自分の名前を書くと「うれしい」と表情が晴れた。「字を書いたのは15年ぶりです。口を使って自分でベルトをはめられる。市販品で合う物がなかったのでよかった」

その様子を心配そうに見守った安武さんは、ほっとした表情を浮かべた。「自助具は一人一人に合わせた一品料理なんです」。依頼者の負担は材料費のみ。今回は廃材も活用したことで数百円で済んだ。

自助具は既製品も数多くあるが、介護保険の対象外で高価な物が少なくない。体に合わずに使いにくいケースもある。

この工房では、ボランティアが第2、第4土曜に活動。「既製品にはないけど、こんな自助具が欲しい」といった要望を受け、センター職員と相談しながら製作に励む。既製品に手を加えたり、一から手作りしたり、個々の事情に応じてやり方はさまざまだ。

ボランティアの山脇一馬さん(88)＝同市南区＝は、腕が不自由な人が背中を洗うためのU字形のブラシを試作中。既製品だと約5千円するが、100円ショップで手に入るツボ押しを活用し、丈夫に作れるよう試行錯誤を続けていた。

山脇さんは開設当初からのベテラン。きっかけは20年ほど前、足をくじいた妻のために木材店に行って松葉づえを手作りし、喜ばれた体験だった。「失敗を繰り返しながら何でもかんでも作ります。物作りが好きなのですが、数年後に『まだ使わせてもらってます』とお礼を言われるとありがたい気持ちになります」

昨年度は47点の自助具を提供した。センター相談員で作業療法士の八尋雅子さん(39)は「人にやってもらっていた作業が自分でできるようになる自助具は、自立につながり、自尊心も保てる。必要な物があれば、センターや日ごろ接するリハビリ職の人に相談してほしい」と話す。ボランティアが高齢化しているため、メンバーも募集中。センター＝092(731)8100。

「見えない虐待」 写真で感じて

NHK ニュース 2017年11月20日



東京都内のギャラリーで開かれている写真展。作品をよく見ると、少し曲がった警棒や、「死にたい」となぐり書きのように書かれた文字など、暴力や負のイメージを伴うものが写されています。この写真展のテーマは「子どもの虐待」。家庭内などで起きて外からは見えづらい虐待を「見える化」して、多くの人に実態を知ってもらおうという取り組みです。(科学文化部記者 信藤敦子)

虐待がテーマの写真展

この写真展は、「児童虐待防止推進月間」に合わせて、東京・墨田区のギャラリーで開かれています(11月26日まで)。



会場に展示されているポートレートは、子どもに親などから虐待を受けた当事者で、その人が受けた虐待にまつわるものを写した写真も展示されています。例えば、幼いころから母親に虐待されてい



たという女性。

本人の顔写真とあわせて、母親から実際に突きつけられたという包丁や、大人になっても自分を肯定できずに「ダメ人間」「死にたい」などつつつたノートの写真などが展示されています。

現場で目にした風景は

この写真展を開いたのは、写真家の長谷川美祈さん(44)。8年前に長女を出産し、初めての育児で戸惑うなか、虐待のニュースを見て「ひとごとではない」と思ったと言います。

「母親になって初めて、誰もが虐待をしてしまう可能性があると思った」という長谷川さん。

写真家として何ができるのか自問し、過去に虐待の事件が起きた現場に足を運んで写真を撮るようになりました。外からは見えにくい虐待の深刻さを、写真で感じとることができないか考えたのです。

長谷川さんは、事件の記事を読んだり裁判を傍聴したりして、20か所の現場を訪ね歩きました。

育児放棄の末に2歳の男の子が亡くなった豪華な邸宅。母親が4人の子どもを置き去りにし、赤ちゃんの遺体が発見されたマンション。生活苦の中で、母親が中学生の娘を殺害した県営住宅…。どの場所にも、自分の周囲と変わらない、何気ない日常が流れていました。

「もっと貧しかったり孤立した場所が多いのではと思っていたら、ありふれた住宅街が多かった。現場に行き、なぜみんな見ていなかったのか、見ようと思えば何かおかしいと気付けたのではないかと感じた。近所の人たちというよりも、自分を含めて今まで何をみてきたんだろうと思った」

虐待の深層に写真で迫る

現場で感じた虐待の深層にもっと迫ろうと、長谷川さんは虐待を受けた当事者たちにインタビューを申し込み、その人たちの顔写真や虐待にまつわる物を撮影していきました。

幼い頃から、両親による暴力を受けていた女性。名前も呼んでももらえず、「バカ」「ブス」「死ね」と言われ続け、いつも下を向いて歩いていたそうです。

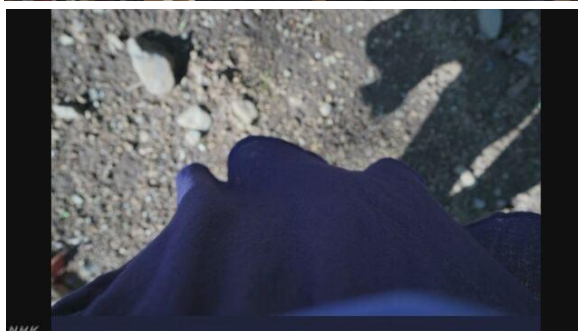
激しく殴られた後遺症か、今も補聴器が欠かせないと言います。

一方で、女性の幼いころのアルバムには、そうした虐待を全く感じさせない、子どもの成長を喜ぶ母親の温かなメッセージが多くつつられていました。

長谷川さんは、女性が下を向いて歩いていたときに見ていた景色や、今もつけている補聴器、アルバムの記述を撮影していきました。

また、別の女性は、両親が1万円だけを食卓に置いて何か月も帰宅せず、ガスも電気も止められた家で過ごしていたということです。

風呂にも入れず、食事をくれた近所の人に泊まるよう勧められても、「きょうは帰ってくるかも」と真っ暗な家に帰ったと言います。



長谷川さんは、その女性がいた児童養護施設の近くの風景や、昔、友人からもらったというピンクの「がま口」を撮影しました。

そのがま口は、プレゼントをもらった経験がほとんどないという女性の、唯一の宝物でした。



長谷川さんは「写真で一人一人の人生をすべて見せたいと思った。つらさだけではなく、つらい中でもどう頑張っているのか、親はどう関わっていたのか、社会は何かしたのかとか、いろんなことを想像できるように」と写真に込めた意図を説明しています。

「もっと実態を知ってほしい」

長谷川さんの撮影に協力した橋本隆生さん（39）も、父親から虐待を受けてきたという一人です。

左目の下には中学1年のときに父親から警棒で殴られてできた傷がありますが、外からはっきりと分かる傷はほとんど残っていません。

橋本さんは、その少し曲がった警棒を今でも大切に持っています。

「痛かったこととか、どんな気持ちだったとか、いろんなものをひっくり返して、これも僕の生きてきた証だと思った」というのが、その理由です。

橋本さんが公開したブログを目にした長谷川さん。橋本さんが住んでいた地域を一緒に訪ね、子どものころ目にしたものを撮影していきました。父親の暴力に耐えかねて家を出た母親と最後に別れた公園や、小学6年のとき死にたいと思いながら歩道橋の上から眺めていた風景。警棒も撮影して「作品」に仕立てました。



橋本さんは「とにかくもっと実態を知ってほしい。長谷川さんの写真には、見ている人に、虐待は見た目ではわからないんだよ、黙って見ていたら何も気付かないんだよというメッセージを込めてくれている気がします」と話していました。

ギャラリーの外でも紹介

長谷川さんが撮影した写真は、ギャラリーを超えた広がりを見せています。

長谷川さんは墨田区が開いた虐待について考える講演会に招かれ、約100人を前に、みずからの取り組みを紹介しました。

撮影した60枚の写真のスライドで紹介しますが、説明は一切しません。

そして、「1枚の写真から想像してほしい。この人たち一人一人がどういうふう生きてきて、どんな思いでいたのかということに思いをはせてもらいたい」などと語りかけました。

講演会には橋本さんも参加し、「虐待について知ってもらうために、いろんな手段で発信していくべきだと感じた。どういう気持ちだったのだろうとか、何を求めていたのだろうとか、そういったことを感じて、知ってもらいたい」と、虐待を写真で表現することへの期

待を語りました。

「自分のことのように考えて」

子どもに深刻な被害をもたらす虐待。その件数は年々増加していて、児童相談所が対応した件数は、昨年度の1年間に12万件余りと過去最多になりました。

こうした中、長谷川さんは写真を通して、一人でも多くの人に目を向けてほしいと考えています。

「今回被写体になってくれた方々の苦しみとか、つらさとか、実際に当事者じゃないとわからない気持ちを、自分のことのように考えてもらえればと思う」。

写真展は、東京・墨田区のRPSギャラリーで11月26日まで開かれています。展示作品の入れ替えがあり、橋本さんの写真などは展示が終了していますが、「Internal Notebook」という写真集で見ることができます。

生まれ変わってもいっしょ？

11月22日は「いい夫婦の日」。同僚の1人はこの話題を聞くたびに、自分の何が悪かったのかと振り返ること、もう2年だそうです。そもそもそんなに「いい夫婦」がいるのかと思うのですが、ある調査では、妻が、夫が一番と思っている人たちも結構いるのだそう。不倫スキャンダルにへきえきとしていた中、世の中捨てたもんじやないと思う、でもやっぱり不満もありますよね。(ネットワーク報道部記者 佐伯敏、郡義之、角田舞)

続きを読む

関連の取り組み ことしも続々

世の中に浸透してきた感のある「いい夫婦の日」。ことしも各地でさまざまな取り組みが行われます。

自治体のPRにつなげようと沖縄県石垣市が始めるのが、婚姻届を市に提出した人にオリジナルの受理証明書を贈るといふもの。

石垣市市民課では「新婚旅行などで訪れたカップルが婚姻届を出すことが多く、この証明書で思い出作りしてもらえるとうれしい」と話しています。一方、村の名前の由来から「愛妻家の聖地」を掲げる群馬県嬭恋村がことし初めて開くのが、夫婦で楽しむ星空観察会。

標高1250メートルにある「愛妻の丘」と呼ばれる場所で満天の星空を天体望遠鏡で観察し、「いい夫婦」にまつわる星の解説も受けられるということです。

「夫婦の日」にも商機あり？

NHK ニュース 2017年11月20日



この日をビジネスチャンスと捉える民間の動きも活発です。

大手洋菓子メーカーの「銀座コーギーコーナー」（東京）は期間限定のケーキを販売しました。夫婦で楽しめるよう、2種類のケーキになっていて、同社は「たまには夫が妻にケーキを贈って、夫婦一緒に食べる時間がコミュニケーションを深めるきっかけの1つになれば」と話しています。

特別の宿泊プランを設定したのは、北海道小樽市のホテル「グランドパーク小樽」。

この日は、客室の明かりでホテルの建物に巨大なハートを出現させて、宿泊した夫婦には、ハート型のケーキを用意するなど、ムードを演出します。

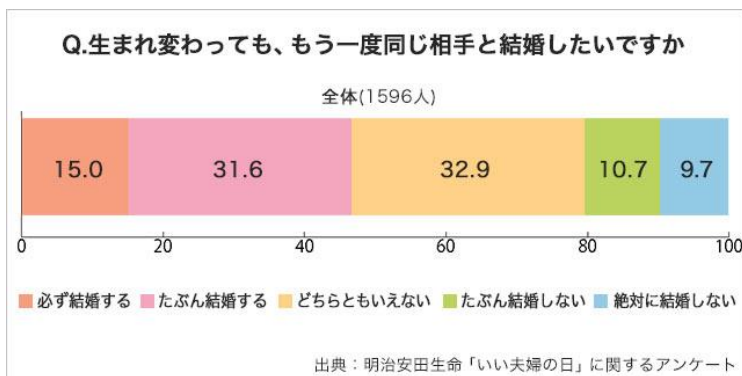
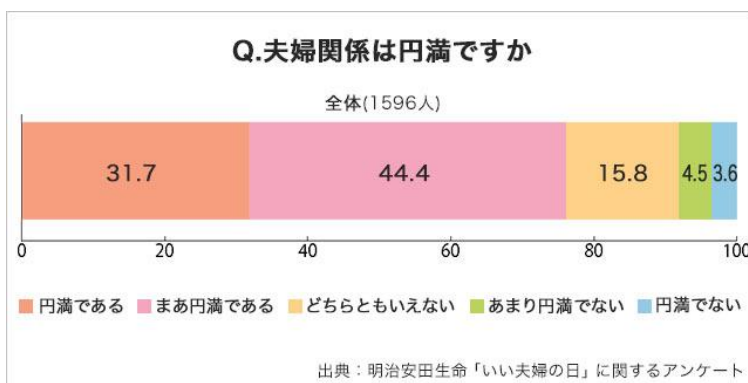
ホテルでは「この日は平日だが、休前日ということもあり、有給休暇を利用して、2人でゆっくり過ごして欲しいです」と話していました。

生まれ変わってもあなたと

こんなサービスが続々と出てくるということは、実は世の中に「いい夫婦」は多いのではないか。

アンケート調査の結果を見てみると、多くの夫婦が「円満」だと感じている現状が見えてきます。

明治安田生命がことし10月に行ったインターネット調査によると、「夫婦関係は円満ですか」という問いに対し、「円満である」と「まあ円満である」と答えた人は全体の76.1%



にも上りました。

ただ一方で「生まれ変わってももう一度同じ相手と結婚したいですか」という問いに対しては「必ず結婚する」が15%、「たぶん結婚する」が31.6%とやや少ない数字が。

調査では「日々の生活では“現実の夫婦関係”を受け入れることで「円満」と感じているものの、生まれ変わっても再び結婚したいと思うほどの“理想の夫婦関係”には達していない人が多い」と分析していて、理想と現実の間にギャップがあるのかもしれないとしています。

妻の不満>夫の不満

では理想と現実のはざまにあるものは何か。同じ調査によると男性の52.6%、女性

の76.2%が相手に何らかの不満を持っているとしています。

夫が妻にいだく不満のトップ3は、

- (1) 整理整頓ができない
- (2) 気が利かない
- (3) 体型が変わってきたところ。

逆に妻が夫に抱く不満では

- (1) 気が利かない
- (2) 整理整頓ができない
- (3) 家事の協力をしない、の順になっています。

何となく予想はつきましたが、やはり妻の不満のほうが夫のそれと比べて大きいようです。

理想と現実 大きなギャップ

男女の不公平感については、興味深いデータがあります。

リクルートブライダル総研の「夫婦関係調査2017」によると、家事の分担比率の理想と現実には大きなギャップがあるということです。

小学生以下の子どもがいる妻が理想とする家事の分担比率は66.5%。これに対して、実際の分担比率は84.6%。

理想と現実の間におよそ18ポイントもの開きがあります。

出産で夫への愛が急降下？

子どもが生まれたあとの振る舞い方で、その後の夫婦関係に深刻な影響が出るという、男性にとってちょっと恐ろしいデータもあります。

東レ経営研究所の主席コンサルタント・渥美由喜さんが行った「女性の愛情曲線」の調査。ライフステージごとに女性たちの愛情の配分がどう変わるかを調べたものです。

グラフでは、結婚の直後には「夫」に最も多くの愛情が注がれますが、出産をきっかけに「子ども」への愛情が高まると同時に「夫」への愛情は急降下します。

問題は、その後の愛情曲線が2つに分かれ、子どもが大きくなっても夫への愛情が戻って

こない人もいるということ

ことです。

渥美さんの調査では、出産直後から乳幼児期にかけての大変な時期に「夫と2人で子育てした」と答えた女性たちの夫への愛情は徐々に上昇して回復しますが、「私1人で子育てした」と答えた女性たちの夫への愛情は低迷したままでした。

渥美さんは「想像以上に、産後の育児参加の有無で、その後の愛情に大きな違いが出ることがわかり驚いた。その後の夫婦関係に何十

年にもわたって影響するので、最も大変な乳幼児期に、大変な育児を夫婦で一緒に担う姿勢が必要だ。子どもが生まれる男性には『ハイリターン投資だから育児にしっかり関われ』と伝えています」と話しています。

共感を呼ぶ企業キャンペーン

外資系の日用品メーカー「P&Gジャパン」は、「いい夫婦の日」にあわせて、夫婦の生活を描いた動画をインターネットに掲載し、話題を呼んでいます。

いろんなことを分け合って生きていこうとスタートした結婚生活が、やがて仕事や子育てに追われるようになり、互いに言いたいことも言えなくなっていく…そんな夫婦の日常を追ったストーリー。

「ふたりでわけあうもの」と題されたおよそ3分の動画は、公開から20日間で340万回以上再生され、ツイッターには「朝から号泣してる」とか「メッセージが刺さる」など、共感するツイートが相次いでいます。

P&Gジャパン ホームページより



「P&Gジャパン」では動画とともに10項目の誓い文をホームページで公開しています。誓い文は、婚姻届とセットになっていて、無料で自由にダウンロードでき、「お互いが得意な家事を見つけよう」や「ひとりでやるほうが早い仕事ほど、分け合ってみよう」などの文章が書かれ、夫婦がチェックできるようになっています。

P&G広報の田上智子さんは「最初仲のよかった夫婦も、月日が過ぎればすれ違いも起きる。家事分担など、互いが頑張っていることを認め合うことで、夫婦の絆を見つめ直してほしい」と話しています。

夫婦円満の秘けつは？

冒頭に紹介した明治安田生命の調査では、夫婦円満のために何が必要かを複数回答で聞いています。

それによりますと、一番多かったのは「よく会話をする」。

次いで「感謝の気持ちを忘れない」、「相手を尊重・信頼する」と続きます。

20代と30代では「育児に協力する」と答えた人が他の世代と比べて多くなっているのも、納得のいく結果です。



そして「相手から言われたいひと言」は、他と大きく差をつけて「ありがとう」が1位でした。

“結婚生活は長い会話”

かのドイツの哲学者ニーチェは著書「人間的な、あまりに人間的な」のなかで次のように述べています。

「長い会話としての結婚生活。結婚生活をはじめる時、自問すべきだ。この女性が年老いても良い会話ができるだろうか？結婚生活では他のことはすべて変化していくが、共に過ごす時間の大部分は会話に属する」寒くなってきた秋の夜長、今夜は妻と夫と肩寄せ合って、たあいのない会話でも楽しんでみてはいかがでしょう。

